

〈2023年度修士論文要旨〉

## 観光まちづくりの持続性に関する研究

——コロナ禍を経た奈良市奈良町を対象として——

高山 哲弥

### I はじめに

2020年の新型コロナウイルス感染症の感染拡大は観光分野に影響を与えている。実際にゲストハウスの廃業や土産物店の閉店、空き店舗の顕在化、中心街の空洞化などの問題が報告されている。そこで本研究では、コロナの感染拡大による観光地における店舗の撤退やそれに付随する空洞化に問題意識を位置付け、町並み保存を目的とした観光まちづくりが展開されてきた「奈良町」を対象に、コロナ禍を経た一連のプロセスから観光まちづくりの変化や効果を見出し、コロナ禍を通じた持続性の要因を明らかにすることを目的とする。そしてコロナの新たな変異株の出現や今後発生する可能性のある感染症等、未曾有の危機に向けた観光地のあり方を検討する。

既往研究の整理からコロナ禍による観光地の空洞化に着目した研究や、観光まちづくりの視点から観光地を維持していく点に焦点を当てた研究、奈良町のコロナ禍での観光とまちづくりに関わる研究は筆者が探した限り不在であることから、観光まちづくりの視点から観光地を維持する要因を見出すことに本研究の独自性がある。そして、本研究では3つのリサーチクエスチョン（以下、RQとする。）を立てた。

RQ1「コロナ禍においても観光まちづくりで形成されたつながりを生かした取組が行われていたか」

RQ2「コロナ禍を経たことで観光まちづくりにおける効果は見られたか」

RQ3「コロナ禍を経ても生活空間と観光空間の共存はしているか」

### II 観光まちづくり

観光まちづくりの定義について既往研究を概観した上で、本研究では西村（2009）の「地域社会が主体となって地域環境を資源として活かすことによって地域経済の活性化を促すための活動の総体」とし、まちづくりを「地域社会を基盤とした地域環境の維持・向上運動」、観光を「資源としての地域環境の利活用をベースとした地域経済の推進活動」としていることから、本研究においても同じ定義とする。

そして、西村（2009）や岡村・野原・西村（2009）、梅川（2012）は、観光まちづくりは「まちづくり」と「観光」の双方が接近した動きとして捉えており、「まちづくりから観光」と「観光からまちづくり」と大きく分けて2つの概念的な枠組みがあるとし、対象地域にどれだけ観光施設や観光産業が立地しているのかによってアプローチが異なるという。

その上で野原（2008）は「まちづくりから観光」と「観光からまちづくり」の2つのアプローチでは与条件と手段までとされていたが、目的が観光かまちづくりかによってさらに整理されるという。

以上のことから、本研究における観光まちづくりはまちづくりを目的とした「まちづくりから観光」のアプローチを概念的な枠組みとして設定する。

### III 奈良町のまちづくり

奈良町の選定理由として、町並み保存に向けた住民主体のまちづくりが観光に結びついた、まちづくりを目的とした「まちづくりから観光」のアプローチによる観光まちづくりが展開されている点から研究対象地域とした。奈良町のまちづくりプロセスと観光空間への成立プロセスについて文献から整理を行った上で、これまでの町並み保存を目的としたまちづくりによる生活空間と近年になってカ

フェや雑貨店の出店や観光情報雑誌に取り上げられたことで成立した観光空間が互いに共存してきたことがわかった。しかし、今後も継続して生活空間と観光空間が折り合いをつけながら共存を保っていくことが課題視されている。

#### Ⅳ コロナ禍における奈良町の観光の現状

コロナ禍を経た奈良町の観光の現状について行政、民間、市民団体、店舗を対象にヒアリング調査とアンケート調査から得られた結果をまとめた。

関西の他市と観光入込客数を比較したところ、前年比は他市と同等に減少しており、行政管理観光施設の来館者数は休館があった時期もあり、激減していた。そのため、コロナ禍における観光客向け店舗では来客数の減少や売上の低下が見られたものの、一方で地元の方や奈良市内の方が中心的に来られていたことが明らかとなった。また、奈良町においては景観の大きな変容や大手資本の参入等も見られなかった。そして、コロナ禍前後の観光客向けの店舗動向調査では、継続して開店していた店舗は全体の約8割であり、全体的な店舗数としては増加傾向にあった。特に飲食店では廃業・撤退が15件見られたものの、その倍の30件がコロナ禍に開業しており、増加傾向が目立った。コロナ禍での開業を決定した理由としては「希望の物件が見つかった」という回答が最も多く、奈良町への出店理由については奈良町への思いや町並みへの思いなどの要素が主に回答に含まれていた。コロナ禍での来客者（地域住民・観光客）の割合については、いずれの店舗において、地域住民が来客者の半分以上を占めていた。さらに行政や地域住民、他店舗等との連携や協力したイベント・取組への参加については、12件中8件が参加していた。

#### Ⅴ エリアを超えた団体間連携の取組調査

コロナ禍を経たまちづくりの側面について、行政と市民団体へのヒアリング調査から得られた結果をまとめた。

コロナ禍において従来までのエリア内で連携したまちづくりの取組が実施されていただけでなく、2017年から「大奈良町夢トーク」による「きたまち」、「京終・高畑」の各エリアの団体との関わりを始めとして、2021年の「第44回全国町並みゼミ奈良大会」の開催に向けた団体間連携が行われ、その1部会だった「奈良町見知り」は2022年以降も年1回の継続開催が見受けられた。以上から、奈良町全体の団体が一丸となった取組が生まれ、新たな段階に入ったことがわかった。

#### Ⅵ コロナ禍を経た奈良町の観光まちづくりによる効果と要因

コロナ禍を経た観光の側面の分析では、これまでの「観光空間拡張期」は続いていると考えられるが、コロナ禍を経たことで変化が見られたことから、本研究では「オーバーツーリズム期（～2019年）」、「観光停滞期（2020～2021年）」、「観光回復期（2022年～）」と時期を細分化した上で、観光まちづくりの効果として①コロナ禍における奈良町の観光客向け店舗の開業と増加、②コロナ禍における地域住民の来客、の2点を見出した。

コロナ禍を経たまちづくりの側面の分析では、本研究においては、この新たな期間を「エリアを超えた団体間連携期（2017年～）」とした。そして、エリアを超えた団体間連携の構築プロセスについて、「エリア間交流期（2017～2019年）」、「エリア間連携期（2020～2021年）」、「エリア間連携継続期（2022年～）」と時期を細分化した上で、①各エリアの団体との新たなネットワーク構築、②地域関係者との新たなネットワークの構築、③これまでの各団体での活動で培われたノウハウの活用、の3点を見出した。

コロナ禍を経た生活空間と観光空間の共存についての分析では、景観の変容や大手資本の参入等がなかったことから、コロナ禍を経てもこの共存は保たれてきたと言える。これは「奈良町の町並み保存・まちづくりの取組→地域住民・来訪者の愛着→奈良町に見合った店舗の立地→奈良町の町並み保存・まちづくりの取組」の好循環が存在していると言える。コロナ禍を経た奈良町では観光客向けの店舗の大半が閉業・撤退しなかったことから、店舗の撤退や空洞化といった問題が発生することなく、衰退せずに持続することができたと言える。そのため、この生活空間と観光空間の共存要因はコロナ禍を通じた持続性の要因と深く関わっていると考えられる。

## Ⅶ おわりに

分析結果をもとに RQ の検証を行い、結論とした。

RQ1の「コロナ禍においても観光まちづくりで形成されたつながりを生かした取組が行われていたか」については、従来までの取組に加え、新たにきたまちや京終・高畑で活動する団体との連携が行われ、「第44回全国町並みゼミ奈良大会」やその1部会である「奈良町見知り」が継続的に実施されていたと言える。

RQ2の「コロナ禍を経たことで観光まちづくりにおける効果は見られたか」については、①町並み保存やまちづくりの取組の新たな展開、②奈良町に愛着を持った店主によるコロナ禍での店舗の開業、③地域住民の継続的な来客、の3つが挙げられる。

RQ3の「コロナ禍を経ても生活空間と観光空間は共存しているか」については、景観の大きな変容や大手資本による参入はなかったことから、コロナ禍を経ても生活空間と観光空間の共存はしていると言える。共存要因としては、「奈良町の町並み保存・まちづくりの取組→地域住民・来訪者の愛着→奈良町に見合った店舗の立地→奈良町の町並み保存・まちづくりの取組」と好循環が生まれていると考察した。また、この共存要因によってコロナ禍を経た奈良町で店舗の撤退化や空洞化等の問題は発生することなく、コロナ禍を経た奈良町が衰退しなかった持続性の要因と深く関わっていると考えられる。

今後の研究の知見としては、本研究ではコロナ禍に廃業・撤退した店舗への調査ができなかったことから、コロナ禍による影響として店舗の廃業要因まで見出すことができなかった。そして最後に、他地域におけるコロナ禍を経た観光まちづくりの研究を蓄積していくことが、今後の観光まちづくりの推進につながると考えられる。これらを今後の研究の課題としたい。

### 主な参考文献

- 梅川智也（2012）『『観光まちづくり』はどこに向かうのか—観光地マネジメントの視点から』日本都市計画学会編『都市計画』61（1）， pp. 7-11
- 岡村祐・野原卓・西村幸夫（2009）「我が国における『観光まちづくり』の歴史的展開——1960年代以降の「まちづくり」が「観光」へ近接する側面に着目して」、『観光科学研究』（2）， pp. 21-30
- 西村幸夫（2009）「1章 観光まちづくりとは何か」，西村幸夫編著『観光まちづくり—まち自慢からはじまる地域マネジメント—』学芸出版社， pp. 10-28
- 野原卓（2008）「観光まちづくりを取り巻く現状と可能性」『季刊まちづくり』19， pp. 30-37